

ハンドボール競技における高身長と低身長のゴールキーパーの阻止率

-関東学生の男女それぞれを比較して-

氏名 加藤 芳規 (201111842、ハンドボール方法論)

指導教員：山田 永子、藤本 元、會田 宏

キーワード：ゴールキーパー (GK)、ポジション・シュート状況、身長差、男女差

【目的】

本研究では、我が国のハンドボール競技において、高身長 GK は低身長 GK に比べて阻止率が高いかどうかを明らかにし、身長の高いまたは低い GK を指導する際、何を優先するべきかという知見を得ることを目的とした。そのため、関東学生ハンドボールの男女 GK を対象とし、それぞれの阻止率を比較・検討した。

【方法】

調査対象者は、平成 26 年度男子関東学生ハンドボール春季リーグ、平成 25 年度女子関東学生ハンドボール春季リーグに出場した全 GK で、男子 30 名、女子 21 名、合計 51 名である。

男子に関しては、高身長は 181 cm 以上 (15 名)、低身長は 181 cm 未満 (15 名) とし、女子に関しては、高身長は 168 cm 以上 (9 名)、低身長は 168 cm 未満 (12 名) とした。この基準は、高身長と低身長の人数がほぼ均等になるように定めた。

阻止率を明らかにするために、全てのシュートを対象に、最終阻止率 ($\text{SAVE} + \text{OUT} \div \text{全体シュート数}$)、枠外の生起率 ($\text{OUT} \div \text{全体シュート数}$)、枠外を除く阻止率 ($\text{SAVE} \div \text{OUT}$ を除くシュート数) を分析した。また、それぞれについて、ポジション・シュート状況別にも分析した。ポジション・シュート状況は、右利きによる右サイドシュート、左利きによる右サイドシュート、左サイドシュート、ロングシュート、ミドルシュート、ポストシュート、カットインシュート、フリースローシュート、リバウンドシュート、7M シュート、組織前速攻シュート、組織後速攻シュートに分けた。

統計的検定は、Fisher の正確確率法をもちいて有意水準を 5%、有意傾向を 10% とした。

【結果と考察】

1. 男女別にみた GK の最終阻止率、枠外生起率及び、枠外を除く阻止率

男子については、すべての阻止率において高身長 GK と低身長 GK の間に有意な差は認められなかった。

女子については、枠外を除く阻止率は高身長 GK が低身長 GK に比べて有意に高いことが認められた。

その理由として、高身長 GK はシュートコースに対して身体を占有している空間が低身長 GK に比べて多いことが挙げられる。

2. ポジション・シュート状況別にみた男子 GK の最終阻止率及び、枠外を除く阻止率

左利きによる右サイドシュートの最終阻止率及び、枠外を除く阻止率は低身長 GK が高身長 GK に比べて有意に高い傾向が認められた。低身長 GK は体幹で形成される「面の小ささ」を補うため、シューターのリリース時まで位置取りを微調整することが多かったと考えられる。そうすることによって、シューターがスイング動作で GK をかわそうとしても、ボールの位置へ身体を移動させることができ、阻止率をあげていると推察される。

3. ポジション・シュート状況別にみた女子 GK の枠外の生起率

組織前の速攻時の枠外シュート生起率は低身長 GK が高身長 GK に比べて有意に高いことが認められた。また、ミドルシュートの枠外の生起率は低身長 GK が高身長 GK に比べて有意に高い傾向が認められた。シューターに GK との間隔を感わせてシュートを打ちにくくする、近目を打たせるように近目を空けるといった意図的な位置取りをし、枠外に打たせていることが推察される。

【現場への提言】

本研究において国内の男子学生に関して身長の高さは阻止率と関係がなかったことから選手選考の際には身長ではなく、他の要因（跳躍力、敏捷性及び、柔軟性）を選考基準とすることが提言できる。

低身長 GK は、ゴールのコーナーに届きにくいコースがある。シュートが打たれる段階では、いつ打たれてもゴールのコーナーに届くような位置取りを完了させ、いつでもミート動作を開始できるように構えを準備することで阻止率があがると考えられる。

高身長 GK はシューターのかわそうとした手の位置へ身体を移動させるような位置取りの微調整を行うことが課題であり、それができれば、阻止率は上がると推察される。